

「生と死の教育の必要性」 I

ーキリスト教の死生観との関連でー

岡 本 富 郎

I. (はじめに) ー問題の所在ー

1. 青少年の現状と今後の教育のあり方

昨今の青少年による犯罪の状況をみると「いのち」が軽視されている事を痛感せざるを得ない。戦後の青少年による犯罪事件は確かに減っていることが分かる。しかし、この数年の増加とその内容は、やはり黙視できない様相を呈している。中学生による幼児殺害事件、路上生活者殺害事件、高校生による幼児殺害事件など、この種の事件は後を断たない。昨今の事件の特徴として、低年齢化、凶悪化、日常は問題を起こさないような一見普通の少年である点、等が指摘されている。これらの特徴は教育に携わるものとして看過してはいけない問題である。

これまで教育関係者が教育に手を抜いてきたわけではない。否、様々な教育の課題についてその都度実践を分析し、研究を試みてきた。文部科学省をはじめ現場でも、それなりにまじめに教育に取り組んできたと思う。勿論実行に移せない多くの問題が存在する事も認識されている。しかし、何故先に述べたような良い子と見えるような子どもが事件を起こすようになったのであろうか。いや、殺人事件のような大きな事件だけではない、いじめといじめによる自殺、個人的な自殺、暴力、暴行、校内での器物破損などが相変わらず発生している。

だがこれらのことを冷静にみれば、これらの子どもの様相は何も子どもに限った事ではない。むしろ子どもの一連の現象は大人の凶悪事件や非人間的な社会の様相が反映していると見るほうが妥当だと思う。しかし、我々教育関係者は少年による事件が大人のあり方の反映であると認識するだけでは無責任と言わざるを得ない。教育当事者として反省すべきは反省し、為さなければならない事は為さなければならない。しかしまたこのことは教育関係者の問題として捉えるだけでは充分ではない。大人、親、社会全体で反省し解決を目指して取り組む必要があると考える。日本社会全体の課題なのである。根本的には国の方向に関わる重要な課題と言ってよい。

教育に絞って問題を考えよう。筆者は子どもたちの様々な事件の背景には、「いのち」の教育の欠落があると考え。1960年代から「所得倍增計画」の名のもとに経済優先の教育が先行し、子どもの間に能力競争をもたらし、「いのち」を教える教育を軽視してきた風潮があったことは否めない。このままでは、子どもたちに真に人間的に生きる人間形成を目指す教育を遂行することは困難である。現在「生きる力」を育てようとして文部科学省はそのための教育政策を掲げて21世紀の我が国の教育に取り組んでいる。しかし、筆者は「生きる力」の根底に「いのち」の教育を据えないその在り方は、明治以降の経済優先

を志向する教育を踏襲することに留まると考える^(註1)。

2. 「いのち」の教育とは何か

さて、ここで筆者が言う「いのち」の教育には2つの内容が包含されるということを述べておきたい。一つは、「いのちが生きること」であり、もう一つは「いのちが死ぬこと」である。今回のメインテーマは「生と死の教育の必要性」である。この場合の「生」とは「いのち」が「生きる」と言うことであり、「死」とは「いのち」が「死ぬこと」である。筆者は子ども達が「いのちが生きることと、死ぬこと」の学習を通して「よりよく生きること」ができるような教育を創出したいのである。言うならばQOL (Quality Of Life—よりよい生—) の教育である。(ここで断って起きたいことは「いのち」「命」「生命」について今回はその相違について言及しないということである)

ところで、先述したような教育を遂行するためには「生きること」だけを取りあげているだけでは真に効果をあげることは出来にくい。「死」を考えることによってより効果的な深い「よりよく生きる」ための人間教育が為されると考えるのである。人間がいつかは必ず死ぬと言う厳粛な事実を知り、死ぬまで「よりよく生きる」ことを目指す人間教育を進めたい。そして更に言うならば「よりよく生きること」を通して「よりよい死」を迎えられるような人間教育を目指したい。この教育を筆者はQOD (Quality Of Death) の教育と呼びたい。

そこで更に考えたい事は、多くの人には奇異に映るかもしれないが「死んだ後どうなるか」という問題である。死んだ後どうなるのかということは、誰しも内心気になっているのではないだろうか。死後がどのようなのかという考え方によって、人それぞれの生き方が異なってくるということが言える。宗教だけには限定できないが、旧来仏教やキリスト教などの宗教的な「死後観」の影響で多くの人が現世での生き方に深い影響を与えられてきたことは認めざるを得ない。

だが、この死後の問題は教育と言うより宗教の領域に入る内容ではある。日本ではさほど議論されていないと理解しているが、「宗教的教育学」の領域の問題であると言える。しかし、一般の教育の領域にも「死後の問題」を視野に入れる必要があると筆者は考えている。そうでないと教育自体に深みが欠落し、上滑りの人間形成に陥ってしまう。しかしながら、従来の教育学では宗教的な内容をも含む体系を構築することはそう簡単ではない。

そこで筆者は従来の教育学では「死」や「死後」と「よりよく生きること」を結ぶ教育論を打ち立てる事は困難であると考え、新たな教育学として「生命教育学」を提案したいと考えて、小さな試論を表わした^(註2)。その中でも言及したが「生命教育学」自体は教育学の一分野ではあるが、学際的な学問となる。現在では医学界でも単に病気を治すだけではなく、病人を人間としてみ、「自然科学以外の人文科学や、宗教学までも学際的に扱うことの必要性が、医療従事者や医学生の一部によって、やっとみとめられるようになった。」と言って他の諸学を取り入れることの必要性が主張されている^(註3)。この「生命教育学」も他の諸学の理論を取り入れて、今後学としての体系を模索しなければならない。例えば少なくとも生物学、医学、看護学、哲学、宗教学、倫理学、心理学、生命学、生命倫理学、人間学、死生学、死学、などの諸学を取り入れる必要がある。それにしてもこれま

で自分なりに学んできた教育思想家のルソウ、ペスタロッチー、フレーベル等は「死」と「死後」と「よりよく生きること」をどうつなげて考えているのかということも正直気になってくる。

そのような教育思想家が上記の問題をどう考えていたかということも気になるが、現在今述べたような問題は既に「生と死を考える会」やデーケン等の「死への準備教育」(Death education)において追及されている。これらの研究と実践から多く学ばなければならない^(注4)。

II. 「生と死の教育の必要性」について

ギリシアの哲学者エピキュロスは「死は、もろもろの悪のなかでもっとも恐ろしいものとされているけれども、それはわれわれにとって何ものでもないのである。なぜなら、われわれが存在している時には、死はわれわれの基にはないし、他方、死が傍にきている時、その時にはわれわれがもう存在していないからだ。」と言った^(注5)。しかし、これは「死」に関しての正確なとらえ方とは言い難い。人間の意識には生きているときから常に死と死後のことが、即ち死への不安感、恐怖感が付きまとっているからである。生の中に死が忍び寄っているのである。換言すれば「死は生の一部である」と言ってよい。それゆえに哲学者のハイデッガーは人間を「死へ臨む存在 (das Sein zum Tode)」と表しているのである^(注6)。

また、プラトンは哲学するということ、そして哲学することと関連して生きるということとは「死への練習である」と言っている^(注7)。心身二元論に立つプラトンは、先ず靈魂 (ψυχή プシュケー) が不滅であり、身体は不完全だと考えた。靈魂は時間の制約を超えた「イデアの世界」(理想の世界、完全な世界) から来て、身体 (σώμα ソーマ) に宿ったと彼は考えた。そして彼は、身体は靈魂を閉じこめる墓のようなものであり、人間の生とは、この靈魂と身体との戦いの過程であると考えた。プラトンの生きることにについて新たに表現すると、生きるとは靈魂を呼び覚まし、イデアという「理想の世界」に向かって靈魂中心の生活をし、靈魂を高め、イデアの世界に帰って行く準備をすることだ、ということになる。不完全な身体を離れてイデア (理想の世界) に靈魂が還ることが人間としての真の完成であると彼は考えたのである。このように考えてプラトンは、この世界で哲学し、生きるということは「死後のイデアの世界へ行くための練習」と表現したのである。

ところでプラトンや過去の思想家だけではなく、「死」と「生」と「死後」については多くの学者、思想家がこれまでに研究し、自分の考えを主張してきた。そして現在の学者たちもこのことを課題として研究しているのである。「生命教育学試論」でも取りあげたが、重要な意味を込めた内容なのでここでも何人かの研究者の考えを紹介しよう。倫理学者の小原信は「新しいいのちの教育とは、生だけではなく、死の問題を含む『死の教育』をする事であり、死ぬ事、生きること、について学び、何らかのプログラムに参加する事が、子どもにも大人にも求められている。」と言っている^(注8)。次に宗教学者の鎌田東二は「生命、いのち、靈魂を問い返す生命観や存在観の変革なしに自分の変革はありえない。

それは同時に、今ここの『私』の生死が何であるかを問うことであろう。生と死の両極から『私』と文明のありかたを問う視座が必要ではないだろうか」と表して、生と死と自分との関係に言及している^(註9)。もう一人、哲学者の間瀬啓充は「自分が生きている人生だけに価値があって、あとは全くの無でしかないとしたら、この短い人生は単なる欲望の満足のために費やされる、ということにはならないだろうか。だからこそ、＜メタファーとしての語り＞として、日本人の『魂』とか日本人の『あの世観』には、今尚現代的な意味があるように私には思われる」と言うことによって、人生とあの世との関係について述べている^(註10)。

このように「生」と「死」と「死後」とを関連づけて「よりよく生きること」を追求する研究者は少なからず存在する。我々は先人や他の研究者の遺産から多くを学び「生と死」と「死後」と「よりよく生きること」を子どもたちが自分なりに関係付けて真摯に考えることができるような教育を推進したい。「生と死の教育の必要性」を強く主張したいのである。

ここまでは、「生と死の教育の必要性」について述べてきたが、その教育内容には言及しなかった。筆者は多くの研究者の研究内容から子どもたちに「生と死と死後」と「よりよく生きること」に関する内容を提示したい。しかし、それらの内容は膨大であり、一生懸かってもそれを研究し、提示することは不可能である。そこで筆者の一大関心事であるキリスト教の「生、死、死後」「よりよく生きること」、(今後これらの内容を「死生観」と呼ぶ)について研究し、それらを教育内容として提示したいと考えている。

しかし、「キリスト教の死生観」と言ってもこれがまた広く深い。それらの深く広い内容の中から「いのち」の概念、「死」の考え方、「死後」、「永遠のいのち」「復活」の捉え方等をこれから順次研究し、それらの内容と「生きること」、「よりよく生きること」とを関連付けて論じたい。

III. キリスト教の死生観

1. 教育学研究としての位置

「キリスト教の死生観」を扱う学問は本来、神学、聖書神学、旧約学、新約学、組織神学、聖書解釈学、教会学等である。筆者はそのいずれの専門家でもない。専門家でもない筆者が「キリスト教の死生観」を研究することは教育学研究者としては筋違いではないかと思われるかもしれない。いや間違っているという批判も覚悟しなければなるまい。しかし、「生と死の教育」を進める当事者が研究しないことには、その教育は効果的に進まないと考える。教育研究者が直接研究することによってその研究内容を噛み砕いて教育内容として整理し、教材化が可能となるのである。勿論神学者が教材化の為に協力してくれればそれもよい。だがそれはあくまでも教育研究者でない者の協力の範囲を出ない。それにしても今のところ筆者にはそのような人は見当たらない。教会学校で用いるためにキリスト教関係者等が聖書から学んだ内容を教材化することはこれまでも為されてきた。だがこれらの教材は教会学校やミッションスクールに対象が限定されており、一般の学校教育の

教育内容としては適切とはいえない。やはり教育学研究者が研究することが要求されるのである。

2. キリスト教の具体的な死生観の内容について

ここではキリスト教の死生観として「いのち」と「永遠のいのち」についてその基本的な考えを聖書にもとづいて示すことにしたい。本来「死」「死後」「復活」との関係で上記の二つの内容を論じるべきであろうが、その内容が余りにも広く深いので今回は上記の「いのち」と「永遠のいのち」の基本的な考え方の、それも大枠に限定して聖書の考えを明らかにしたい。残され「死」「死後」「復活」についての内容については、別の機会にその基本的な考えを論じたい。

1) 「いのち」について

まず、「いのち」について聖書が説いている内容を紹介したい。キリスト教の人間の「いのち」についての考えは創世記の1章の記事が元になっている。

即ち「神である主は、土のちりで人を形作り、その鼻にいのちの息を吹き込まれた。そこで人は生きものとなった。」と記されている。(創世記2章7節)^(注11)

神は人に「いのちの息」(「息」はヘブル語で「ルーアハ」という。「霊」と同義である)を吹き込まれたとある。ここでは「いのち」が神の「いのちの息(霊)」と表現されている。そして、ここでは「ちり」(「ちり」はヘブル語で「アダム」と言う。最初の人アダムの語源である。)で作られた人間が「いのちの息(霊)」を神によって吹き込まれた存在とされている。人間は「ちり」のままでは「いのち」を持った存在とはなり得ないと言うことがここから理解される。それゆえ、人間は「いのちの息(霊)」を戴いた霊的存在として考えられているのである。また、ここでは人間は「いのちの息(霊)」を吹き込まれて「生きたものとなった」とある。「いのちの息(霊)」を吹き込まれることによって、「生きたもの」すなわち「霊的ないのちある存在」となったということが、ここから分かる。このように人間は神の「霊的ないのち」を戴いて生きる存在として聖書では説かれているのである。

聖書が説く「いのち」の基本的な内容は「創世記」に記されている以上の内容である。そこで、「いのち」についてキリスト自身がどのような考えを持っていたのかについて述べよう。

イエス・キリスト自身が直接言っている「いのち」に関する言葉を具体的にみてみよう。キリストの言葉を紹介することは多少煩わしいかも知れないが、具体的なキリストの言葉を総合的に関連させてみることによって、彼の「いのち」の考えが理解しやすいと考えるからである。

「狭い門からはいりなさい。滅びに至る門は大きく、その道は広いからです。そして、そこからはいつて行く者が多いのです。いのちに至る門は小さく、その道は狭く、それを見いだす者はまれです。」(マタイによる福音書7章13節～14節)

ここで言う「いのち」はギリシア語の「ζωή Ζωーエー」である。他に聖書では「ψυχή プシユケー」「βίος ビオス」が「いのち」を表現する用語として用いら

れている。キリスト及び新約聖書では「ζωή Ζοーエー」が多く用いられている。

次に「人は、たとえ全世界を手に入れても、まことのいのちを損じたら、何の得がありましょう。そのいのち（φύξις プシユケー）を買い戻すのには、人は何を差し出せば良いでしょう。」（同福音書16章26節）

「わたしがいのちのパンです。わたしにくる者は決して飢えることがなく、わたしを信じる者はどんなときにも、決して渴くことはありません。」（ヨハネによる福音書6章35節）

「いのちを与えるのは御霊です。肉は何の益ももたらしません。わたしがあなたがたに話したことばは、霊であり、またいのちです。」（同6章63節）

「わたしは世の光です。わたしに従う者は、決して闇の中を歩むことがなく、いのちの光を持つのです。」（同8章11節）

「わたしは、よみがえりです。いのちです。わたしを信じる者は、死んでも生きるのです。」（同11章25節）

「わたしが道であり、真理であり、いのちなのです。」（Ἐγώ εἰμι ἡ ὁδὸς καὶ ἡ ἀλήθεια καὶ ἡ ζωή.）（ヨハネ14章6節）唐突であったが、新約聖書が書かれた言語である、ギリシア語でキリストのことばを代表的に引用してみた。この14章6節は特に有名な、よく引用される言葉でもあるからである。

これらの言葉から考えられることは、キリストが説く「いのち」は生物的なそれではなく、あくまでもキリストが与える「いのち」であるということである。すなわち、「霊的ないのち」である。キリストはご自分が「いのち」であると言っている。また、神の一人子としてのキリストは神自身であると聖書は言う。キリストは「わたしと神とは一つである」（ヨハネによる福音書10章30節）「わたしを見る者はわたしを遣わした方を見るのである」（同12章45節）と言明している。そして、聖書の他の箇所には「神は霊である」（同4章24節）と説明されている。霊である見えない神としてのキリストの「霊的いのち」を戴いた者は真の「霊的いのち」を持つことが出来ると言うのである。それゆえ聖書では「わたしはキリストと共に十字架につけられました。もはやわたしが生きているのではなく、キリストがわたしのうちに生きておられるのです。」と言うのである。（ガラテヤ人への手紙2章20節）キリストを信じる人の中に「いのち」そのものであるキリストが内在して生きていると、ここでは説かれている。

ここで、キリストが説く「いのち」についての説明を終えて次に「永遠のいのち」についてキリストの考えを紹介したいと思う。

2) 「永遠のいのち」について

ここでも 先述したような意図の基に、キリスト自身が言っている「永遠のいのち」についての具体的な言葉を引用しよう。

「だれも天に上った者はいません。しかし、天から下った者は居ます。すなわち人の子です。モーセが荒野で蛇を上げたように、人の子もまた上げられなければなりません。それは信じる者がみな、人の子にあって永遠のいのちを持つためです。神は、実に、そのひとり子をお与えになったほどに、世を愛された。それは御子を信じる者が、ひとりとして滅びることなく、永遠のいのちを持つためです。」（ヨハネによる福音書3章13節～17節）

ここでは「永遠のいのち」が「ζωήν αἰώνιον ゴーエーン アイオーニオン」とギリシア語で表わされている。「永遠のいのち」はこの表現が多い。

次に「しかし、わたしが与える水を飲む者はだれでも、決して渴くことはありません。わたしが与える水は、その人のうちで泉となり、永遠のいのちへの水がわき出ます。」(同4章14節)

「あなたがたは、『刈り入れ時が来るまでに、まだ四か月ある。』と言ってはいませんか。さあ、わたしの言うことを聞きなさい。目を上げて畑を見なさい。色づいて、刈り入れるばかりになっています。すでに、刈る者は報酬を受け、永遠のいのちに入れられる実を集めています。それは蒔く者と刈る者がともに喜ぶためです。」(同4章35～36節)

「まことに、まことに、あなたがたに告げます。わたしの言葉を聞いて、わたしを遣わした方を信じる者は、永遠のいのちを持ち、さばきに会うことがなく、死からいのちに移っているのです。」(同5章24節)

「あなたがたは、聖書の中に永遠のいのちがあると思うので、聖書を調べています。その聖書が、わたしについて証言しているのです。」(同5章39節)

「なくなる食物のためではなく、いつまでも保ち、永遠のいのちに至る食物のために働きなさい。」(同6章27節)

「わたしを遣わした方のみこころは、わたしに与えてくださったすべての者を、わたしがひとりも失うことなく、ひとりひとりを終わりの日によみがえらせることです。事実、わたしの父のみこころは、子を見て信じる者がみな永遠のいのちを持つことです。わたしはその人たちひとりひとりを終わりの日によみがえらせます。」(同6章39～40節)

「わたしは彼らに永遠のいのちを与えます。彼らは決して滅びることがなく、また、だれもわたしの手から彼らを奪い去るようなことはありません。」(同10章28節)

「自分のいのちを愛する者はそれを失い、この世でそのいのちを憎む者はそれを保って永遠のいのちに至るのです。」(同12章25節)

「わたしは、父の命令が永遠のいのちであることを知っています。それゆえ、わたしが話していることは、父がわたしに言われたとおりを、そのままに話しているのです。」(同12章50節)

「父よ。時が来ました。あなたの子があなたの栄光を現わすために、子の栄光を現わしてください。それは子が、あなたからいただいたすべての者に、永遠のいのちを与えるため、あなたは、すべての人を支配する権威を子にお与えになったからです。その永遠のいのちとは、彼らが唯一のまことの神であるあなたと、あなたの遣わされたイエス・キリストとを知ることです。」(同17章1節～3節)

最後に引用した言葉で「その永遠のいのちとは、彼らが唯一のまことの神であるあなたと、あなたの遣わされたイエスキリストを知ることです。」とあると言い、「永遠のいのち」とは何であるかを説いている。(αὐτὴ δὲ ἐστὶν ἡ αἰώνιος ζωὴ, ἵνα γινώσκωσὶ σε τοῦ μάνον ἀληθινόν Θεόν, καὶ ὁ ἀπέστειλας Ἰησοῦν Χριστόν.) ここではギリシア語が重要な意味をもつので引用した。ここから理解できることは、ここで言う「永遠のいのち」(αἰώνιος ζωὴ アイオーニオス ゴーエー everlasting life, eternal life)

とは死後よみがえって、その後ずっと続く時間的な死後のみの「永遠のいのち」ではないということである。

勿論聖書全体で言う「永遠のいのち」は死後も続く「いのち」であることは理解できる。このことに関しては聖書の「福音書」以外の箇所、特にパウロ書簡に表わされているパウロの考えを分析して知ることが出来る。しかし、聖書やここでキリストが言う「永遠のいのち」は現世にあって始まる、時間を超えた質的な「永遠のいのち」のことである。既に人間はこの世に存在して「永遠のいのち」を戴き、その「永遠のいのち」が死後も続くということを聖書は説いていると考える。ここで「永遠のいのち」と時間性との関係について理解したい。ここでは「死後」という場合、「後」という意味は、我々に分かりやすく時間的な表現が用いられているだけであり、先述したように「永遠のいのち」は時間を超えた世界の質的な内容であると言うことを理解しておきたい。

ここでキリストが主張する「永遠のいのち」について知ることになろう。「永遠のいのち」はここでは「神とイエス・キリストを知ること」(γινώσκωμαι 知ること)となっているので、神を知ることが「永遠のいのち」であると考えられる。ここで神学者であるテニーから学ぶとにしたい^(注12)。彼によると『知る』(γινώσκω ギノースコー)という言葉は、分け与えられた知識というよりは、むしろ生きた触れ合いという意味を持っている。一中略一『ただ神を知ることだけが、尽きるところのない満足を与えることが出来る。神だけが永遠に続く者だからである。神との触れ合いによって、もっとも豊かな経験が与えられるであろう。また神の存在を経験することは、永遠のいのちとなろう。知るという動詞の時相が現在形であるのは、次のことをもまた示すのである。『永遠のいのちは、ある完結している知識を所有すると言うよりも、日々新たになっていく知識を得ようと努力することのうちに見いだされるものである』永遠のいのちは、成長し、広がって行くものであり、静的なものではない。^(注13)

テニーによると、「神を知ることとは、神との「生きた触れ合い」を経験すること、それ自体であると解釈されている。聖書はその経験は「聖霊」によってのみ可能であると説く。

ところで、本来ヘブル語で「知る」という意味は「一体となる」という意味を持つ。その意味と関連させて考えると、ここでキリストが言う「知ること」という意味は、自分の全人格を用いて生きた神との触れ合いを経験し、神にすべてを任せるということになる。「信じること」と言ってよいであろう。「信じること」とは自分の「いのち」と「死」をすべて本源なる永遠者としての神に委ねることだからである。そして更に言うと、生きた神に自分の中に入って戴くことである。「いのち」そのものは神から出ているので、神に入って戴き、すべてを任せて神との関係に入ることである。墮落以前のアダムと神との関係に入ることである。これらのことを考え、再度言うと、「永遠のいのち」そのものである神との本来的な関係に入ること自体が「永遠のいのちを持つこと」となるのである。

以上簡単に「永遠のいのち」について、主にキリストの言葉を引用することを通じて考察した。

IV. (おわりにかえて)

この小論では「キリスト教の死生観」を「いのち」と「永遠のいのち」の基本的な内容に限定し、考察をした。前にも述べたように、聖書で言う「いのち」「永遠のいのち」は他の内容、すなわち「死」「死後」「復活」と関連して解釈しなければならないことを十分理解しているつもりである。その作業は再度言うことになるが、別の機会に委ねる。

そしてもう一つのことを言うと、今回述べた内容を教育にどのように取り入れるかは、更にその後の仕事になっていくであろう。地味な、教育実践には遠い道のりではあるが一步一步地道に歩んで生きたいと思っている。

注

- (注1) 菅井 保 「死生観の教育学的考察」 東海大学紀要 海洋学部(一般教養) No. 23, 1997
菅井 保 「生と死の教育研究—その必要性と可能性から—」 東海大学紀要 課程資格教育センター 第7号 1997 東海大学菅井教授による上記の二つの論文は、人間にとって「生と死の教育」が根本的に必要であるという、筆者と同様の問題意識で書かれている。
- (注2) 岡本 富郎 「生命教育学試論」 白梅学園短期大学「教育・福祉研究センター」「研究年報」No. 6 2001 この論文で筆者は「生命教育学」の学問的性格と生命教育学が取りあげる内容について論じた。
- (注3) 日野原重明, 山本俊一編 「死生学—死から生を考える—」 技術出版 1988. p. 5.
- (注4) 生と死を考える会編 「生と死の意味を求めて」一橋出版 2002. 兵庫・生と死を考える会「生と死の教育」研究会編 「いのちと心の教育 生と死の教育 教育現場で実践できるカリキュラム」 1999. 前上智大学教授で日本に於ける「死への準備教育」の提唱者であるアルフオンス・デーケンの仕事は多岐に渡っている。その中から次の本を紹介するに留める。「生と死の教育」 岩波書店 2001. (梅原優毅共編), 「死への準備教育のための120冊」1996. <叢書>「死への準備教育」1巻「死を教える」2巻「死を看取る」3巻「死を考える」メヂカルフレンド社 1986.
- (注5) 山本 光雄, 戸塚 七郎 「後期ギリシア哲学者資料集」岩波書店 1985. P. 59
- (注6) ハイデッガー 細谷貞雄 亀井裕 船橋弘共訳「存在と時間上・下巻」理想社 1969. ハイデッガーは「存在と時間」の第一部 第二編, 「現存在と時間性」の中の, 第一章「現存在の可能的な全体存在と, 死へ臨む存在」の中で, 人間が「死へ臨む存在」であることを論じている。「das Sein zum Tode」という言葉を上記の本の下巻P. 15で用いている。「死に向かう存在」という訳もある。
- (注7) プラトン 松永雄二訳 プラトン全集1所収の「パイドン」 岩波書店 1975. この本の中で人間が哲学することが「死への練習である」と説明されている。ソクラテスにとっては哲学することは「よりよく生きることを求めること」につながっていた。プラトンは「パイドン」の中でソクラテスに次のように言わせている。「その死とはいったい, いかなるものとしてあるのか—中略—ほかでもなくそれは, 魂が, 肉体から離れ別れることではないだろうか。すなわち, 死をむかえたということは, 一方では, 魂から分離されて, からだがまさしくからだだけのものになりおえることであり, 他方では, 魂が, からだから分離されて, まさに魂だけのもの, となることではないだろうか。いったい, どうか, 死というものがそれ以外のもので, はたしてあるだろうか。」pp. 177~178 「それとも, どうか, 知を求めること(哲学すること)とは, まさに死の練習である, としていいのではないだろうか。) pp. 234~235. ここでソク

ラテスは哲学すること、すなわちよりよく生きることを求めるということは「死への練習である」と言っている。

- (注8) 関根 清三編 「死生観と生命倫理」 東京大学出版会 1999. P. 259
- (注9) 多田 富雄 他編 「生と死の様式－脳死時代を迎える日本人の死生観－」 誠信書房 1991. P. 184
- (注10) 関根 清三編 前掲 P. 203
- (注11) 「聖書－新改約－」日本聖書刊行会 1970. P. 2 尚, 文中で引用する聖書の箇所は頁を注書きにしないで, 聖書の箇所と, 章, 節を文中に記した。聖書の頁は聖書の翻訳によって異なるからである。文語訳, 口語訳, 新改訳, 共同訳などが主にある。これらの聖書でも章, 節は共通するので章と節を文中に記した方が分かりやすい。小論で引用するギリシア語及びギリシア語の文は次の聖書による「The Interlinear Bible-Hebrew-Greek-English」 With Strong's Concordance Numbers Above Each Word. Jay P. Green. Sr. General Editor and Translator. HENDRICKSON PUBLISHERS. 1976.
- (注12) メリル シー. テニー (Merril C. Tenny) はアメリカのホイートン大学の神学者である。引用した文は彼の「新約聖書註解 ヨハネによる福音書」舟喜順一訳 聖書図書刊行会 1958. である。
- (注13) 同P. 246